

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔紹介〕 國學院大學日本文化研究所編井上順孝責任  
編集『〈日本文化〉はどこにあるか』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 齊藤, 智朗, Saito, Tomoo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000301">https://doi.org/10.57529/00000301</a>

〔紹介〕

國學院大學日本文化研究所編 井上順孝責任編集

# 『〈日本文化〉はどこにあるか』

齊藤智朗

日本文化は日本列島で独自に展開・発展してきた——このよ  
うな〈日本文化〉の一般的なイメージに対して、DNA研究や  
認知科学といった最新科学の手法・成果を参照しつつ、現代の  
グローバル化の観点から日本文化を再考した本書には、「人間  
が外的環境及び内的環境との関わりの中で形成しえた文化の一  
つ」であり、「最初からグローバルな環境において形成されたし、  
今もグローバルな環境の中で変容している」（ともに序論より）  
とする新たな〈日本文化〉像が提示されている。

本書は、平成二十七年十月二十四・二十五日の両日、國學院  
大學日本文化研究所の設立六十周年を記念して開催された「日  
本文化」研究の展望」と題する公開講演会及び国際フォーラム  
の講演内容を踏まえて、講演会講師と四人のフォーラム発題者  
が新たに書き下ろした五本の論考を、右のような本書の意図や  
背景を明確に示した責任編集者による序論である「複雑な渦の  
中にある〈日本文化〉」とともにまとめたものである。また各  
章の扉の裏には、本書のテーマにそくした解説も付されている。

第一章の篠田謙一氏(国立科学博物館副館長兼人類研究部長)による「DNAで読む日本人の形成史」は、近年の人類学分野におけるミトコンドリアDNA解析の成果に基づいて、日本人の起源や成立を論じたものである。DNA解析や考古学的な化石から、現生人類(ホモ・サピエンス)が二十万年前頃にアフリカにいた一人の女性を起源とし、六万年前には「出アフリカ」を成し遂げたことがわかっており、それゆえ日本人の起源に關する問題は、人類がその後、日本列島にいつ、どのように来て、日本人が成立したかにある。渡来時期やルーツは、四万年前に三つのルートで日本列島に入ってきたとしている。日本人の成立経緯については、ミトコンドリアDNAの系統を遡って共通の祖先に到達するもの同士をまとめる「ハプログループ」を用いると、現代の日本人は渡来系弥生人と同じD4のハプログループが高いが、縄文人に見られるN9bも有するなど、両者が混合して形成された様子が窺われることから、日本人の起源については、アジアの集団の成り立ちを考える必要があるとする。加えて日本本土の集団に対し、アイヌ民族や琉球列島集団はハプログループが異なることから、日本列島集団の歴史を単眼的に統一して捉えるのではなく、複眼的に各々異なる歴史をもつて成立したと見るべきであり、グローバリゼーションの時

代にあつて「異なる価値観を持つ集団との付き合い方」を模索している現在、遺伝的に多様な集団が日本という一つの国を作っていると認識することは重要であると説いている。

第二章のスチュアート・E・ガスリー氏(フォーダム大学名誉教授)の「神仏はなぜ人のかたちをしているのか——擬人観の認知科学」(藤井修平氏訳)は、近年「宗教」のカテゴリーは西洋に限定的なものとされるが、あえて通文化的に見れば、宗教は非人間的な事物に人格を与える「擬人観」を有するとして、認知宗教学の観点から擬人観について検証したものである。非人間的現象に対して説明できない時、人間は自らをモデルに理解するという哲学者のヒュームが説いた観点や、人格存在によるものとするほうに賭ける「バスカルの賭け」の原理に基づき、擬人観は人間が進化の過程で得た認知的戦略の副産物であるとす。また最近の認知神経学では、擬人観は脳のシステムの自動的な働きで、認知する対象が人間でないとかわかっていても作動するとされており、擬人観を通じた宗教理解は、認知科学や神経科学、進化論の面にも基盤を得るものとしている。

第三章の河野哲也氏(立教大学教授)による「アフォダグン」と生態学的倫理の構築」は、これまで「法的なもの」が倫理学で優位にあることに対して、環境との共生を基本とする「生

「生態的倫理」に基づく倫理学を提言したものである。すなわち、従来の倫理学は社会の安定や秩序を求める傾向から、「法的なもの」を重視する一方で個別性を軽視しがちだが、人間と社会はダイナミックなものであり、人間の創造的な活動を促す環境を作る生態学的倫理を構築すべきとする。この倫理は、生態心理学者のギブソンが説いた、動物と環境の相互依存関係である「アフォーダンス」の概念を重視してのもので、①倫理を「環境問題」として捉える、②倫理的価値を個人の成長と集団における生命多様性の増大に置く、③適用に境界がない、の三点を特徴とするという。具体的には、個々の人間の「ケイパビリティ」（潜在的能力）を開発し、環境の変化に対して自分の望む生活の質を維持できるミニマルな福祉の基準としての「レジリエンス」（回復力、復元力）の確保を倫理実践の中核に置くことで、生命の多様性を豊かにする開かれた社会を築くものであるとする。またこのような生態学的倫理は、人間を人類という一つの共同体の市民と捉えるコスモポリタニズムを採用するものとして、殊に国境を越えた福祉や教育の重要性を説いている。

第四章のウィリアム・W・ケリー氏（イェール大学教授）の「ローカルな生活世界から見える現代日本——人類学者の視点から」（加藤久子氏訳）では、現代日本の社会構造の形成過程

について、二十世紀後半に筆者が山形県庄内地方で現地調査を重ねた経験をもとに分析している。特に黒川能に関して、外部の消費者向けにはローカルな伝統と宣伝されるが、内部の人々の間では不断に変化しているものとする正反対の本音があり、こうした構造を、筆者は当初、「表舞台と裏舞台」という演劇的なメタファー、「建前と本音のアナロジー」として関心をもったという。しかし、現実には内部と外部の関係は複雑であり、部内者は外部を意識して黒川能がどうある「べき」かをめぐり議論しつつ、外部に相對する中で結束するという、部内者と部外者、伝統と近代の間の複雑な相互作用が見出せるとする。そして、日本の未来は「人口崩壊」に代表される悲観的な予言がなされているが、二十世紀の日本はモダニティという西洋固有の概念に挑む先駆者として、社会科学に新たな手法をもたらし、モダニティへの理解を多様化したように、地域再生などによる持続可能な新しい社会づくりを構築することで、二十一世紀も日本社会は十分に先駆者たり得るとの可能性を示している。

第五章の井上順孝氏（國學院大學教授・研究開発推進機構長・日本文化研究所長）による「現代日本宗教のリバースエンジニアリング——今を観察することから始める」は、日本宗教の古代から現代への変化を辿る従来の研究に対し、逆に現代から古

代へ遡るリバースエンジニアリングの手法を採り入れ、また自然環境といった外的環境ではなく、人間の脳内の働きである内的環境に注目することで、宗教現象への新たな理解や視点を提供する理論を展開している。まず、宗教は進化の過程で多くの形態が淘汰されて現在の姿となり、存続している宗教現象は進化の過程にあるとする新たな宗教進化論を説いた上で、脳科学や認知科学で説かれる内的環境や、進化生物学者のドーキンス

が示した、様々な観念や行動形態のモデルになる文化的遺伝子である「ミーム」の概念を適用して、現代の日本宗教はミーム複合体であり、その現象や文化は一定の淘汰を経て内的環境に組み込まれているとする。以上のことから、現存するものを出発点にその起源と展開過程を探るリバースエンジニアリングによる宗教文化の研究を提起し、同手法を用いて現代の日本宗教が世界の宗教的要素の複雑な組み合わせから構成されることを例示している。さらに脳神経認知科学関連の諸研究の成果をもとに、自分と信仰を共有しない者に対してカルトや原理主義のように時に攻撃へと結びつくのは、理性や善悪の判断（脳認知科学における「分析的システム」ではなく、直観的な認知（TASS）が作動した内的環境によるものとする。このように、多様なミームによって構成される宗教は、その組み合わせ次第

で他者と調和的にも対立的にもなると言え、こうした人間の脳内に組み込まれた遺伝的・ミーム的なものの強い力やその発現のメカニズムを明らかにする方法を追究することにより、古代から現代にわたる宗教現象の理解が進むものと説いている。

本書のもととなる講演会・フォーラムを開催した日本文化研究所は、昭和三十年、当時國學院大學理事長・学長の石川岩吉を中心に、本学の母体であった皇典講究所の伝統を継承するとともに、広く世界的視野に立って日本文化を研究することを目的に設立された研究機関であり、神道を中心とした日本文化に關して、古典や史資料に基づく緻密な研究を蓄積してきた一方で、グローバルな観点からの研究にも夙に取り組んできた。紹介者もかつて研究者としての第一歩を本研究所で踏み出したが、当時を含め、本研究所は設立以来、常に日本文化研究の第一線に立ち続けている。この設立六十周年の際も、過去を振り返るのではなく、「これからの日本文化研究の新たな地平へのチャレンジの可能性を探る」（「あとがき」より）ことを目指しており、常に最先端の日本文化研究を推進してきた本研究所の気概と矜持が本書からは見出せるのである。

（四六判、二四八頁、春秋社、二〇一六年八月発行、定価二二〇〇円＋税）